遠藤周作『海と毒薬』論（二）
――〈演じ〉続ける戸田と〈心の苛責〉――

大塩香織

はじめに

昭和三三（一九五八）年に刊行された遠藤周作『海と毒薬』は、昭和二〇年に九州帝国大学で実際に行われた相川事件を元に、戦時下の大学病院で医者たちが生体解剖に参加していく過程を描いた作品である。本作品は遠藤作品の中でも多くの論者によって論じられてきた作品だが、先行論の中心は作中登場人物のうち勝呂ではなく戸田にあった。それは、作品内の戸田の手記に戸田の内面が詳細に描かれているからである。しかしながら、作品の中に描かれる田部夫人、おばはん、そして米軍捕虜の全ての死に立ち会ったのは戸田ではなく勝呂のほうであった。このことから、作品の中心人物は勝呂であるとして既に拙論[1]の中で勝呂が生体解剖参加に至るまでを論じておいた。しかし、作品内に「医学生」という名の手記が配されていることから、作品における戸田の重要性も看過できない。本稿では、改めて戸田に焦点を当て論を進めていきたい。

先行研究が戸田を中心に行われてきたのは、戸田の手記が生体解剖と結びついていることを前提に、戸田が手記の中で次のように描いているからであろう。

〈これをやった後、俺は心の苛責に悩まされるやろか。自分の犯した犯罪に震えおののくやろか。生きた人間を生きたまま殺す。こんな大それた行為を果したあと、俺は生涯くるしむやろか〉

戸田は生体解剖に参加することで〈心の苛責〉に〈悩まされる〉と考えている。それだけではなく、戸田は〈心の苛責〉に〈悩まされる〉ことを望んでいる。この〈心の苛責〉は戸田が同じく手記に記した〈他人の眼や社会の罰〉に対峙するものとして、先行研究ではたびたび引用されてきた。この二つのキーワードを用いて生体解剖という行為に対し戸田が罪意識を持っているか否かが繰り返し論じられてきたのである。佐伯彰一は〈ぼくらの中には、世間と社会の罰をしか知らぬ「不気味な心」がひそんでいるのではなかろうか？〉と述べ[2]、戸田が自らに感じる〈不気味〉さを、〈ぼくら〉日本人の問題に拡張させている。佐伯に対し、笠井秋生は〈もし、罪の意識が不在であるなら、「他人の眼や社会の罰」にも恐れを抱かないであろう〉と述べている[3]。佐伯の論と笠井の論は、

どちらも戸田の〈他人の眼や社会の罰〉だけを気にする〈不気味〉さから、罪意識の有無を明らかにしようとする論である。

勝呂が作品に描かれる田部夫人、おばはん、米軍捕虜の全ての死に関わり、その姿が第三者によって語られるのに対して、勝呂と同じ研究室に所属する戸田がそれらに関わっていく描写は少ない。生体解剖に至るまでの戸田が描かれるのは戸田自身による手記の中が主であり、その手記に描かれるのも作品内で進行される現在ではなく、戸田の青少年期である。つまり、戸田が生体解剖参加に至るまでには、戸田の青少年期が大きな役割を果たしていると言えるだろう。にも関わらず、戸田の青少年期を重視した先行論は少ない。佐古純一郎は、戸田の青少年期について次のように述べている。[4]

> 遠藤氏は、その生体解剖事件に参与した戸田という青年医師の生い立ってきた過去を、彼自身の口から語らせながら、（中略）数数の罪に身をゆだねながら、しかも、さして良心の苛責を感じることなく平然として生きることができた事実を告白させるのである。

佐古に限らず、戸田の手記は生体解剖と関係あるものとして扱われながらも、戸田の青少年期は〈数数の罪〉とひとまとめにされてきた。戸田の青少年期に詳しく言及した論として峰村康広の論[5]が挙げられる。峰村は戸田の手記を〈決定的な罪悪感を感じずに生きてきた〉戸田の〈自己を対象化しようというのが彼の手記の試みなのである〉とする。その上で、手記に描かれた戸田の体験を四つに分け論を進めている。峰村は従姉との姦通と佐野ミツの堕胎について〈二つの事柄はいずれも法に抵触する〉という点で他の体験とは〈趣が異なっている〉としている。それらを踏まえ峰村は、青少年期の体験と生体解剖の関連を戸田が〈殺人〉を繰り返すことで、いつか苦痛を感じるのではないかと思うのではないか〉とまとめている。戸田の体験のうち〈殺人〉と結びつくのは佐野ミツの堕胎の場面だけである。この論では青少年期の体験全体を検討しようとしながらも、実際には佐野ミツの堕胎のみが戸田の生体解剖参加に影響を与えていると見なしている。

手記に描かれた全ての体験を総体として、改めて手記を整理する作業が必要だろう。本稿では、それを踏まえて戸田がなぜ生体解剖に参加せざるを得なかったのかを考察したい。

一、六甲小学校

戸田の手記では、戸田自身が小学生だった頃から生体解剖参加を受け入れるまでが時系列に並べられている。それらは大きく五つに分けられる。六甲小学校、N中学、従姉との姦通、ミツの妊娠・堕胎、それに戸田が医学生になってからである。本稿でも、手記の順にならって論を進めていく。

戸田が所属していた六甲小学校は〈ネギ畠と農家〉に囲まれた〈神戸市灘区の東はずれ〉にあった。生徒は、そのほとんどが〈百姓の子供〉だったが、その中で戸田は唯一〈医者〉の子供であった。戸田が〈百姓の子供〉ではないということは戸田の外見や振る舞いにも表れている。他生徒たちが〈銅貨大の禿をこしらえたそれらのイガグリ頭の中には背に赤ん坊を背負って登校する者もあった〉のに対し、戸田は〈髪の毛を長く伸ばしている男の子〉であり〈将来、上の学校に進学する〉存在であった。六甲小学校の生徒たちと戸田は、同じ学校の生徒でありながら

外見と将来の進路という点で交わることはなかった。

戸田は、右の理由から教師や生徒たちから特別扱いを受ける。その特別扱いとは具体的には〈学芸会では必ず主役をやらされ、展覧会では絵にも書き方にもきまって優等の金紙がはられ〉たりすることである。周囲のそのような扱いに対して、戸田は〈純真であること〉と〈賢いこと〉を意識的に使い分け、教師たちや両親の期待に沿う〈善い子〉を〈演じ〉ていく。それによって、戸田は勉強ができる優等生にもなれた。戸田の自尊心はこのとき、自らに与えられた〈善い子〉という特権によって満たされていたと言えるだろう。

戸田に対する周囲の特別扱いは転校生の登場によって唯一の特権ではなくなってしまう。その転校生は〈東京から転校してきた〉生徒で戸田のように〈髪の毛を長く伸ばしていた〉。戸田と同じく、この転校生も〈百姓の子供〉ではない。〈ネギ畠と農家〉に囲まれたこの地に〈東京〉からやってきた転校生は他の生徒とは差別化される点も戸田と共通している。その転校生は教師から〈若林クン〉と呼ばれた。転校生に対する周囲の人間の反応に、戸田の自尊心は傷つけられる。周囲の人間からの特別扱いはそれまで戸田の〈一人だけの特権だったから〉である。

戸田は転校生がいる教室で〈純真さ、少年らしい感情を感じさせる場面を織りこんでおいた〉作文を朗読する。転校生は作文を読み上げた戸田に対して、次のような表情を見せたと戸田は読み取る。

> と、彼の頬がかすかに赤らみ、うすい笑いが唇にうかんだ。（みんなは瞞されてもネ、僕は知っているよ）その微笑はまるでそう言っているようだった。（ネギ畠を歩いたことも、標本箱が惜しくなったことも皆、ウソだろ。うまくやってきたね。だが大人を瞞せても東京の子供は瞞されないよ）

戸田は転校生の〈うすい笑い〉から、自らの〈ウソ〉が見抜かれたと感じる。そもそも、周囲から認められた戸田の〈善い子〉像は、戸田が周囲の期待に応えようと〈演じ〉続けることによって出来上がったものであった。戸田は〈善い子〉を〈演じ〉ているという秘密をこの転校生と共有したと感じたのである。それは、転校生もまた、〈百姓の子供〉ではない生徒として人々に認識され、それゆえに周囲が求めるように振舞わなければならないからだろう。

しかし、転校生の登場によって失われかけた戸田の自信はすぐに回復される。転校生が〈ぼくと同じように髪の毛を伸ばし、都会風の洋服を着ていても力も強くなく勉強もあまり出来ない〉ことを知ると〈皆はこの女の子のように青白い彼を莫迦にしはじめ〉たからである。戸田にとって〈勉強〉において転校生よりも優れており、周囲からの評価が得られていれば転校生が戸田の脅威になることはないということである。

他方で、転校生が他の生徒からいじめられるのを目撃した戸田は次のような反応を見せている。

> それを眺めながら、ぼくは喧嘩をとめようという気も起きなかったし、あの子を可哀想とも思わなかった。いや、むしろマサルやススムがもっと撲れればいい、髪の毛を引っぱればいいとさえ、考えていたのだ。

転校生が来たばかりのころには戸田の場合と同様に特別扱いし迎えた生徒たちが、ここでは逆転して転校生をいじめている。マサルやススム

が転校生を撲ったのは、〈髪の毛を伸ばし、都会風の洋服を着て〉、周囲から特別扱いされるべき存在のような外見をしていながら、その内実は〈力も強くなく勉強もあまり出来ない〉からである。戸田は〈百姓の子供〉ではない自らと同じ境遇の転校生が〈力も強くなく勉強もあまり出来ない〉ことによって周囲からいじめられるのを見て、勉強ができる〈善い子〉であり続けなければ、自身もまた周囲から排撃されるだろうということを知っただろう。それは、〈善い子〉として周囲から認められた戸田の存在自体の儚さを示すものでもある。

だとすれば、このとき戸田が〈百姓の子供〉たちが転校生を〈もっと撲ればいい〉と考えているのはかなり複雑である。戸田が転校生と自らを重ね合わせたのなら、戸田は誰よりも早くこの〈喧嘩〉を止めるはずだ。戸田のこの反応には、転校生が戸田の分身であるからこそ、いじめたいという願望が含まれている。戸田は特別扱いされることによって自尊心を満たされながら、同時に〈善い子〉の戸田像は、戸田にとって演技によって作られたものであるという自覚があった。それゆえ、戸田は自らが演じる戸田像を壊してしまいたいと感じていたのである。〈百姓の子供〉とは異なる境遇の戸田が、同じ秘密を共有する転校生をいじめることは、戸田自身をいじめることと同義である。

戸田の転校生への暴力に加わりたいという願望に含まれているのは、それだけではない。それは〈百姓の子供〉たちと同じように振舞ってみたいという感情である。戸田は周囲から特別扱いされればされるほど、戸田と同級生たちが交わることはなくなっていく。それは、戸田だけが教師から「戸田君」呼ばれることに他生徒たちが〈とりたてて、ふしぎがりはしない〉ことにも表れているだろう。戸田は周囲からの特別扱いを享受しつつ、それが自らの〈ウソ〉によるものであると感じてしまうからこそ、周囲の人たちと同様に振る舞いたかったのではないだろうか。

しかし、戸田には〈百姓の子供〉たちと同じように転校生をいじめることはできない。マサルやススムが転校生をいじめている運動場に〈教師の影〉が見えると、戸田は次のような振る舞いを見せる。

「喧嘩はよせ。喧嘩は」うしろで教師が見ているのを充分、意識しながらぼくは声をはりあげた。「マサル。転入生をいじめんとけよ。先生が来はるぜえ」

戸田のこの言動は、直前の〈百姓の子供〉たちと一緒に転校生をいじめたいという願望とはかけ離れている。この場面でも、戸田は教師の前で〈善い子〉を〈演じ〉てしまう。なぜなら、周囲の人々が求めるのは〈善い子〉の戸田だからである。

転校生が再び転校することになり、教室を出るとき転校生は〈あのうすい嘲笑のような笑いを頬にうかべた〉。〈あのうすい嘲笑〉とは、戸田が教師や生徒たちの前で作文を読み上げたとき、まさに周囲の人々の前で〈善い子〉を〈演じ〉ているとき、転校生の唇にうかんだ笑いである。その笑いを戸田は（みんなは瞞されてもネ、僕は知っているよ）（ネギ畠を歩いたことも、標本箱が惜しくなったことも皆、ウソだろ。うまくやってきたね。だが大人を瞞せても東京の子供は瞞されないよ）という転校生からのメッセージとして受け取った。転校生が自身に対抗する存在ではないと認識してからも、戸田は転校生に自らの演技が見破られていると考えていたのである。

戸田が転校生の〈あのうすい嘲笑〉に対抗するように行ったのは、同級生の木村に〈万年筆〉をあげることである。戸田が読み上げた作文の

中での〈ウソ〉とは、木村に〈標本箱〉をあげることが〈惜しくなる〉という点にある。戸田は〈これをくれてやることが惜しいとは思いもしなかった〉。〈標本箱〉に対して〈万年筆〉は戸田にとって〈部屋の中で自分が一番大切にしている〉ものである。木村に〈万年筆〉をあげ、戸田が〈惜しい〉という気持ちを持てば、それは〈善い子〉を演じ続けきた戸田の唯一の〈事実〉となる。戸田は今までの自らの行為が全て〈演じ〉ることによって作られた自分だと考えていたからこそ、〈惜しい〉という気持ちを欲したのだ。

このように戸田は〈大切〉な〈万年筆〉を木村にあげたのにも関わらず、戸田には〈善いことをしたと言う良心の悦びや満足感は一滴も湧いてこなかった〉。戸田の〈万年筆〉をもらった木村は〈汗まみれのぼくの顔と万年筆とを狡そうに見くらべながら、少しあとずさりをした〉。木村が〈万年筆〉に対して喜ぶことはなかったのである。他の生徒と同じく〈百姓の子供〉と思われる木村にとって〈万年筆〉の価値はないに等しかっただろう。木村と戸田とのズレが、この場面で戸田に〈悦び〉を与えることをしなかったのである。戸田は周囲から特別扱いに答えるように〈善い子〉の演技を繰り返すことで期待に応えたが、戸田自身がそこに満足を得ることはなかった。その上、戸田が〈百姓の子供〉である同級生たちと同じ〈悦び〉を共有しようとしても、それが成功することは遂になかったのである。

二、N中学

六甲小学校では〈医者〉の子であること、それに見合う〈善い子〉を演じることで周囲から優遇された戸田だったが、進学先のN中学では〈B組にいる眼だたぬ平凡な生徒〉になってしまった。それは戸田と同じような境遇の生徒が多くいたからである。N中学は成績順にクラスを振り分け、生徒の個性は成績によってしか計られなかった。それは六甲小学校で〈医者〉の子であること、〈勉強〉ができること、それによって特別扱いされるという戸田の特権すら失われたことを意味する。

N中学で戸田の心を惹いたのは、博物の教師であるオコゼが持ってきた蝶の〈硝子箱〉であった。戸田はその蝶の〈硝子箱〉を授業後に盗む。その蝶は珍しく他で見たことのない変種で、なにより〈京大の山口博士〉など周囲から評価される蝶であった。オコゼにとって大切なものであったのである。オコゼとは〈膝の丸くなったヨレヨレの洋服を着て〉、〈窪んだ小さな眼をしばたたかせながら、自分の一生は六甲山にいる昆虫の研究に捧げるのだと、生徒に言いきかせる〉ような男である。中学の教師であるということは、オコゼが小学生や中学生の頃は大学などに進むような優等生であったことが想像できるが、尊敬されぬ博物の教師となった現在のオコゼにその影はない。その姿は、六甲小学校では唯一無二の存在として持て囃されるもN中学ではその一切を失ってしまった戸田と類似する。戸田がオコゼの〈標本箱〉を盗むという行為は、自身と似た道を辿ってきたオコゼの唯一誇り得るものを奪うことを意味していた。他方で、学校唯一の〈善い子〉ではなくなり、〈善い子〉を演じなくてもよくなった戸田は、盗みという社会的に悪とされる行為への欲望を噴出させたとも言える。

戸田が盗んだ蝶の〈硝子箱〉について、戸田の予想外の出来事が起こる。それは〈硝子箱〉の犯人が別のクラスの山口にされていたことである。戸田の代わりに罰を受け〈情けない姿〉を見せる山口に対して戸田は〈心の苦しさ〉を覚えている。ここまで、戸田が他者にこのような

〈心の苦しみ〉を持つ場面はなく、これ以降も描かれない。山口の場面でのみそれが表れるのである。それでは、戸田に〈心の苦しみ〉が訪れたのは〈他人の眼や社会の罰〉を恐れたからだろうか。しかし、戸田がこのとき意識するのは〈他人の眼や社会の罰〉ではなく戸田の代わりに犯人にされた山口の顔である。山口を戸田は次のように思い浮かべる。

ぼくは山口という生徒の小猿のような顔を思いうかべた。そいつはこの中学では一番、学業のできぬ連中のいるC組の生徒だった。中学生の中には必ず卑屈な道化師となって組の人気をえようとする奴がいるものだが、この山口がそうだった。

山口は周囲から存在を認められようと演技をする〈道化師〉だった。それは人々から評価されようと〈善い子〉を〈演じ〉続けた小学校のころの戸田に重なる。戸田は〈善い子〉として評価され、山口は〈道化師〉として嘲笑される点では二人は対極である。しかし、それらが演技であるという点では共通しているのである。〈運動場にたたせられた〉山口は〈肩をおとし、背をまげはじめた〉。その姿は〈情けない〉もので、このとき山口は〈道化師〉でない。

戸田が演技によって作り出すのが他者から評価されるような〈善い子〉だとすれば、演技ではない、素顔の戸田は決して〈善い子〉ではないみじめな姿だろう。〈道化師〉であった山口は運動場にたたせられ〈情けない姿〉を見せていた。この姿に、戸田は〈善い子〉を〈演じ〉た自身の素顔と重ね合わせたのではないだろうか。つまり、罰を受けさせられる山口を見るのは、戸田にとって自身が罰を受けさせられるのと同義なのである。戸田は山口の〈うなだれた〉姿に、自らのありのままの姿を重ねて〈心の苦しさ〉を覚えたのである。換言すれば戸田にとって周囲からの評価に左右されない、ありのままの自分とは、自身と同じように演技を続ける他者が、その仮面を捨てみじめな姿を見せることによって見つけられるのである。思えば、六甲小学校で自身の分身である転校生に暴力という罰を与えたいと感じたのも〈善い子〉という殻を壊すことで、自身のありのままの姿がはじめて表れると考えたからではなかったか。

戸田の〈心の苦しみ〉をそのように理解すれば、翌日山口が〈得意そう〉な姿を見せ、いつもの〈道化師〉に戻ると戸田の〈心の苦しさ〉も霧消したのも当然であるだろう。山口は前日の失敗さえ〈道化師〉として笑いに変えたのである。とすれば、戸田が自らの素顔と重ね合わせた〈情けない〉姿さえ演技であったかもしれない。戸田は他者と自らが交わらないことをここでも知ったのである。

三、従姉との姦通とミツ

戸田が姦通をした従姉もまた、戸田の素顔を見ていたわけではない。従姉の夫は〈大阪の私立大学〉出身であるのに対し、戸田は〈浪速高校〉の生徒であった。戸田がN中学では〈B組にいる眼だたぬ平凡な生徒〉であったのにも関わらず、この場面では〈浪速高校の理科〉に進学しているのはややご都合主義的であるが、従姉は「やっぱり、女はちゃんとした大学出と結婚すべきねえ」と呟く。従姉は男性の優劣を出身大学で判断している。戸田はその判断基準の上では、従姉の夫より優位に立ったと言える。六甲小学校のときと同じように、戸田はここでは〈浪速高校〉の生徒としては存在を認められたのである。

従姉は〈誰にも言うたら駄目よ〉という条件をつけ姦通を許した。従姉にとっての姦通とは〈ツマらない〉日常からの一時的な逃避で、それは戸田とではなくても良いものであった。従姉に対して、戸田は性交に〈ながい間、好奇心をもって考えていた〉のにも関わらず、〈なんの悦びも感動もなく童貞を失った〉。この時、戸田もまたその相手が従姉であることは問題ではなかった。その点、従姉と戸田はお互いに自らの欲求を満たす道具として利用しあったと言える。

これまで、戸田の中で他者から見られるのは〈善い子〉や〈浪速高校〉の生徒などという特権的要素だけであった。六甲小学校のときはそれでも〈善い子〉を〈演じ〉続けることで戸田は応えようとした。その背後には〈善い子〉として特別扱いされることで満たされるものに対する損得勘定もあっただろう。従姉との姦通の場面で、夫より優れた〈浪速高校〉の生徒として扱われたことによって、戸田の損得勘定は再び浮上する。N中学で戸田は〈情けない姿〉の山口にありのままの姿を見ようとしたが、戸田のそれが他者に認められることはない。そのうちに、戸田もまた、損得勘定を含めずに他者のありのままの姿を見ようとする意識を失っていくのである。

〈女中〉であるミツを妊娠させ〈自分の手で胎児を掻爬した〉場面でさえも、戸田の損得勘定は働いてしまう。むしろ戸田は〈女中〉であるミツが医学生の自分との子を持つことで得られるミツの利益を推測したのではあるまいか。そもそも、損得勘定を通して他者を見ること自体がその相手を道具として、相手の仮面しか見ていないと言えるだろう。戸田が他者と関わる上で、そのことで得られる利益がある時点で、戸田は他者をかけがえのない存在として見つめることができなくなってしまうのである。

それでは、損得勘定を介さずに他者を見つめることはできるのだろうか。それが作品内で唯一描かれるのは、勝呂のおばはんに対する視線である。勝呂はおばはんに〈執着〉していることを戸田にからかわれ、次のように考える。

> 彼は自分の気持をどう、戸田に説明していいのかわからなかった。（俺、あの患者が俺の最初の患者やと思うとるのや）と言うのが恥ずかしかった。（俺、毎朝、大部屋であの髪の黄色くなったおばはんの頭をみるのがタマらんのや。鶏の足みたいな手を見るの苦しゅうなるんや）と打明けるのが恥ずかしかった。

勝呂がおばはんに対して抱いた〈執着〉は勝呂にとって〈どう、戸田に説明していいのかわからな〉いものであった。この〈気持〉は、〈大杉部長の親類〉である田部夫人に対して〈態度も診断も丁寧に〉なったおやじたちの心情とは異なるものであると言っていい。勝呂のおばはんに対するそれは、その人の立場やそれによって利益を得られるか否かに関わらないものでありながら、他に代わりを見つけることはできない唯一無二のものである。勝呂はおばはんの中に、その存在のかけがえのなさを見つけていた。勝呂はおばはんと関わることによって、なんの利益も得られないからこそおばはんの固有性を見ることができたのである。

六甲小学校から自らの特権以外を見つめられることがなかった戸田は、当初は周囲が作り出した戸田像に近づこうと〈善い子〉を演じる。しかし、それも意味を成さなくなってからは徐々に自らも他者に固有性を見出そうとしなくなった。代わりに生まれたのは、自身の得になるか否かという視線であった。この視線は〈他人の眼や社会の罰だけ〉を意識し

たという戸田の言葉とも通じる。だが同時に、この手記は戸田が一人の人間として周囲に認められようともがくも、それを逃し続ける過程を描いたものであるとも言えるだろう。

四、医学生

医学生となった戸田が所属する大学病院では、医学部長を頂点とする医者同士の序列関係が形成されていた。その中で医学生の戸田は最下層の位置にいる。ここで求められるのは業績のみであり、価値判断は医局や上部の医師の役に立つかどうかであった。ここでもまた、戸田にしか行えない仕事はなく、戸田の固有性が見出されることはない。内にいる一人一人がかけがえのない存在として扱われることがないのは、大学病院に限ったことではなかった。当時の日本は〈みんなが死んでいく時代〉であり、生きている者も戦争に役立つ者は駆り出されていく。そこにあるのは人々を数として捉える視線であり、一人一人の個が見つめられることはない。戸田の手記が作品内でただ〈医学生〉と題されるのはそれゆえである。

その中で、唯一戸田という存在を求めるのは患者たちである。〈肺手術後の患者〉は戸田に「先生。お願いです。麻酔をうってつかあさい」と懇願する。しかし、ここで戸田が求められているのは戸田が〈麻酔〉をうつことができる医者だからであり、その意味では戸田個人が求められているとは言えない。六甲小学校で〈医者〉の子であること、〈勉強〉面で優れていることで一人の人間として認められたのと同じく、患者たちは戸田そのものよりも戸田が持つ役割を求めているのである。戸田もまた患者に対して、固有性を見出すことはない。その点、おばはんに〈憐憫〉の情さえ抱いた勝呂とは対照的である。勝呂がおばはんにしたように、仮に戸田が患者の中に一人一人の個を見出したとしても、患者たちは〈どうせ死ぬ〉運命にあった。戦時下、〈病院で死なん奴は毎晩、空襲で死ぬ〉状況で、医学生の戸田は〈おばはん一人、憐れんでいたってどうにもならんね。それよりも肺結核をなおす新方法を考えるべし〉と勝呂に言わざるを得なかったのである。

拙論で既に指摘したように、生体解剖もまた他者を役に立つか否か、数として捉える立場から見れば有益であると言える。医者たちは生体解剖を行うことで、業績も西部軍との繋がりも不特定多数の患者たちのための新たな治療法も得られる可能性があった。他者の固有性を見出すことに価値がない状況下で、青少年期から他者に求められた自己像を〈演じ〉てきた戸田は、生体解剖参加という道に流されていくしかなかったと言える。

五、〈心の苛責〉の在りかた

戸田が生体解剖に参加せざるを得なかった理由をそのように考えると、一点疑問が浮かぶ。生体解剖当日、戸田が〈ひどく真剣な表情でノートになにかを書きこんでいる〉という描写から、戸田はこの手記を少なくとも生体解剖の直前までは書き綴っていたことが推測されるが[6]、戸田は生体解剖に参加することによって〈心の苛責〉を得られると考えているのである。戸田の手記を振り返れば、戸田が唯一〈心の苛責〉を感じたのは、N中学自身の代わりに罰を受けた山口の〈情けない〉姿に対してだけである。山口に対してそれを感じたのは、普段は周囲からの評価を得るために〈道化師〉となる山口が罰を受けることで〈情けない姿〉を

見せたとき、その姿と自身とが重なったからである。それでは、戸田はなぜ生体解剖に参加することで、山口の姿を見たときのように〈心の苛責〉を得られると考えたのだろうか。

生体解剖の対象となったのは米軍捕虜の男である。この男が生体解剖の対象にされたのは、言うまでもなく〈日本軍に捕えられた米国の兵士〉だからである。そこで注目されるのは男の米軍捕虜という役割のみであり、男の固有性が見つめられることは一度もない。一方で、男の死は誰とも交換し得ない。死は演技によって作られるものではない。つまり、その死の場面に立ち会うことは、与えられた役割から解放された男の素顔に対面できるということである。その男は手術台の上で〈草色の身に合わぬ作業服〉を脱がされ、同時に男が米軍捕虜という役割を担う存在であると誰も証明できなくなる。この姿は普段〈道化師〉だった山口が戸田のせいで〈情けない姿〉を見せた場面と重ねることができないだろうか。

捕虜は〈米国の兵士〉として生体解剖という名の罰を受ける。山口の場面のように、普段演じる役割を脱ぎ捨て罰を受ける姿に戸田が本当の自分を見出し〈心の苛責〉が得られるのだとすれば、生体解剖もまた戸田にとって〈心の苛責〉を得られる機会になりうるのである。

しかし、生体解剖が行われた手術室で、〈ゲイリイ・クーパア〉に似たその捕虜は、麻酔をかけられ苦しむどころか〈小さな鼾をかいて〉眠り、〈唇のまわりにはかすかな微笑さえ漂っているように思われるほどうっとりとした〉表情を見せていた。捕虜は自らの死を知らないまま死に、戸田が〈心の苦しみ〉を感じた山口のように〈情けない姿〉を見せることはなかったのである。そのため、戸田の〈本能的な恐怖〉は生体解剖のときでさえ一瞬であった。生体解剖で捕虜を殺したときでさえ戸田の意識が捕虜という一人の人間へ向けられることはなかったである。

おわりに

戸田は手記の中で繰り返し自らの行為を〈ぼくだけではあるまい〉と読者に同調を求める。生体解剖に参加する前、戸田と勝呂は〈対空監視員〉として屋上から空襲を眺めなければならなかった。

その日の爆撃は烈しかった。F市の四方からまたたくまに白い煙がたちまちのぼり、炎がゆらぐのがはっきり見えた。一群のB29が半時間ほど上空を旋回して海の方に消えると、次の編隊がまた西の空から芥子粒ほどの姿をみせた。それがたち去ると更に第三の群れがあらわれる。県庁や市役所の建物も新聞社やデパートも次々に炎と煙とに包まれていくのが、ここからも手にとるようにわかった。

ここでは死にゆく人々の姿は描かれていない。敵機さえも〈芥子粒〉ほどの小ささで街を破壊していく。作品で繰り返し描かれるのは戦時下における死であった。人の死でさえ一人一人の固有性が見つめられることはない状況下では、戸田の行為は否定できない。作品で描かれた日本全体が、このときには固有性を全く無視しているのである。このような状況があり続ける限り、戸田と他者との関わりは戸田が〈善い子〉を演じることでしか成立せず、戸田が他者と自らの固有性を見つけることはないだろう。

戸田は自らの固有性を求めながら、他者を道具として扱った。そのような戸田の視線を俯瞰する読者たちは、この視線を否定し切れるだろう

か。戸田の〈ぼくだけではあるまい〉という発言には、読者たちもまた含まれているだろう。

『海と毒薬』の舞台が戦時下に設定されていることは、単に事実に即しているからだけではない。戸田は自らが他者のかけがえのない存在になる機会を逃し続け、自身が他者を見る視線までも個を見つめなくなり、生体解剖参加に至る。戦時下の日本全体にも、固有性を尊重する眼差しはない。他者の固有性を見出さないという点で、生体解剖は戸田とも戦争とも結びつくだろう。遠藤は生体解剖を描くことで、戦争そのものを描こうとしたのである。

思えば、遠藤の文壇的処女作とも言われる「白い人」[7]や「黄色い人」[8]も戦争の物語であった。このことから、遠藤を論じる上で遠藤に戦争が何をもたらしたかを再確認する必要がありそうだ。更には、遠藤の最後の長編純文学小説である『深い河』[9]にもまた、戦争に日本兵として出陣した経験を持つ木口という人物が登場する。遠藤の戦争に対する意識が長期間受け継がれているならば、遠藤における戦争体験は遠藤文学において根幹をなすものとなる可能性を有しているのではないだろうか。

注

(1) 「遠藤周作『海と毒薬』論——三つの〈死〉をめぐって——」(『言語・文学研究論集』一五号、平成二七・三、白百合女子大学言語・文学研究センター)

(2) 佐伯彰一「解説」(遠藤周作『海と毒薬』、昭和三五・七、新潮社)

(3) 笠井秋生「『海と毒薬』——日本人的な感覚の追究」(『遠藤周作——その文学世界』、平成七・一二、星雲社)

(4) 佐古純一郎「解説」(現代日本キリスト教文学全集五巻『原罪と救い』、昭和四七・一〇、教文館)

(5) 峰村康広「生体解剖という踏絵—遠藤周作「海と毒薬」を読む—」(『近代文学研究』二三号、平成一八・三、日本文学協会近代部会)

(6) 下山嫂子は「『海と毒薬』—〈語り〉のディメンション—」(『日本文学研究』四二号、平成一五・二、大東文化大学日本文学会)の中で、手記の執筆時期の曖昧さを述べている。それについては下山の指摘の通りだが、本稿では生体解剖直前まで書かれた箇所があるという前提で論を進める。

(7) 遠藤周作「白い人」(『近代文学』五月号、六月号、昭和三〇・五、六、近代文学社)

(8) 遠藤周作「黄色い人」(『群像』一一月号、昭和三〇・一一、講談社)

(9) 遠藤周作『深い河』(平成五・六、講談社)

附記　本稿における『海と毒薬』本文引用は、全て『遠藤周作文学全集』第一巻(平成一一・四、新潮社)に拠る。